

韓国における通訳翻訳教育 韓国外国語大学通訳翻訳大学院の場合

金 静愛

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程)

Graduate School of Interpretation & Translation, Hankuk University of Foreign Studies (hereinafter referred to as GSIT) was established as the first interpretation and translation graduate school in East Asia in 1979, and it commemorates the 30th anniversary of its foundation in 2009. GSIT, as an educational institution, has played a central role in developing interpretation and translation industry in Korea, turning out more than 1,500 individuals equipped with excellent skills in interpretation and translation.

First, this paper presents an overview of educational training on interpretation and translation in Korea, which has not been much discussed in Japan so far. Secondly, it points out some problems of the curricula at the institutions, then explores the ideal form of interpreting education. It attempts to provide a new perspective for interpretation and translation training in Japan by demonstrating detailed course contents at GSIT and self-directed training methods.

1. はじめに

韓国外国語大学通訳翻訳院（以下 GSIT）は、1979 年に東アジア初の通訳翻訳大学院として設立され、2009 年でちょうど 30 周年を迎える。1986 年のアジア競技大会や 1988 年のソウルオリンピックにおいて、GSIT は韓国屈指の通訳翻訳士養成機関として知られるようになったのだが、さらに、1991 年の湾岸戦争や 2003 年のイラク戦争の生中継などを通じて、通訳士という職業に世間の注目が集まるようになり、GSIT への関心も同時に高まった。GSIT は、これまでに約 2,800 人以上の人材を輩出¹⁾するなど、韓国における通訳翻訳の発展の歴史において、中心的役割を果たしてきた教育機関である。

GSIT は、国内外から多数の受験者が集まるため、受験競争率は年々高まっている。「GSIT が設立され 25 年がたった現在、韓国の各種専門通訳は本大学院の卒業生がほぼ 100%担っているといっても過言ではない」と前大学院長²⁾が述べているように、GSIT は高度に専門的な人材を輩出し続けてきた。韓国は日本と同様、通訳翻訳士の国家的な資格制度は存在していないのだが、通訳翻訳大学院の卒業証明書がそのまま通訳翻訳士の地位を表しており、社会的にも高い認識を得ている。これは、入学試験のみならず卒業試験を厳しくすることで、徹底的に通訳翻訳士のレベルを維持・管理を行い、社会的な信頼を築いてきた結果と考えられる³⁾。現在の大学院長は新聞のインタビューに答え、「ここ数年間に 6,7 校の通訳翻訳大学院が新しくできたが、わが校が脅かされるとは思わない」と自信を見せているように⁴⁾、GSIT の卒業生たちは、韓国の通訳翻訳士のトップ集団を形成しており、GSIT は実力と人材層の厚さにおいて優位を維持し続けている。

近年、経済のグローバル化が急速に進展する中で、通訳翻訳を取り巻く環境は、30年前のそれとは大きく変化している。まず、国際会議⁵⁾や実業界における通訳翻訳のニーズが高まっている。そしてその一方で、人材の供給に目を向けると、海外旅行の自由化より海外留学が増加⁶⁾したことや、情報通信技術の発達により外国語に接する機会が格段と増えたことで、外国語に堪能な人材は増加の一途を辿っている。もはや外国語は一部の人々の特権ではなくなったと言えるだろう。こうして外国語の裾野が広がりを見せる中、30周年という節目を迎えたGSITは、外国語教育とは違う「通訳翻訳教育」という、高度に専門的な人材を育成するための教育を、より発展させていくための転換期にさしかかっている。

本稿の目的は、これまで日本ではあまり知られることのなかった、韓国における通訳翻訳教育について紹介し、そのカリキュラムの問題点や課題について指摘するとともに、通訳翻訳教育のあり方を模索することである。GSITにおける授業内容や自主学習の方法などを具体的に示すことで、日本における通訳翻訳者の養成にひとつの視点を提供したい。また本稿が、日本との共通課題における、相互協力交流の可能性について考える一助となることを期待している。

2. GSITの概要

2.1 目的と理念

韓国のみならず国際的なレベルの国際コミュニケーション専門家の育成と、国際的な視点と専門家の素養を併せ持つ国際会議通訳士や専門翻訳士の育成、韓国内の通訳翻訳分野における学術理論の確立、教育方法論開発、他分野との協力を担う高度に専門的な実務家の養成を教育目的としている。

2.2 沿革

1979年に「同時通訳大学院」という名称で同大学院が開設された当時は、7ヶ国語（英語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、日本語、アラビア語）であったが、現在は8ヶ国語（英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、中国語、日本語、アラビア語）の学科を擁している。1983年には「韓国外国語大学付属通訳翻訳大学院通訳翻訳センター（ITC、以下センター）」が卒業生の自治組織として設立され、通訳翻訳サービスと通訳翻訳研究を行ってきた。

1997年に研究部門が「通訳翻訳研究所（ITI）」として独立、センターは2001年に「通訳翻訳センター（CIT）」と改称し、2006年に現センターである「通訳翻訳院（CIT）」と改められた。GSITは、1997年に専門大学院に昇格、1999年に韓国初の通訳翻訳学博士課程を新設した。また、アジアで唯一の国際会議通訳士協会（AIIC）認定大学院であり、2004年には、世界通訳翻訳大学（院）協会（CIUTI）の正会員として加入した。

2.3 特徴

韓国政府は、高度な専門的人材育成を行うGSITに注目し、開校後間もない1980年から1988年まで、数十億ウォンに達する支援を行った。また、教育省が推進する「頭脳韓国21（Brain Korea21）」⁷⁾の高度な人材育成事業の中、外国語通訳翻訳特化大学院としてGSITを単独選定し、1999年から5年間に渡り100億ウォンの莫大な国家的支援を行った。国家の支援を受けGSITでは、需要が拡大している企業の通訳、放送報道通訳などの人材育成とともに、国家的に重要な翻訳物の生産、翻訳

物の質のモニタリング、国家公認翻訳資格制度などを担当する国策翻訳院を学内に創設する計画であり、通訳翻訳を体系的にサポートするため、大規模の専門用語バンク構築作業にも取り組んでいる。

2.4 講師陣と学生たち

研究者を養成する一般大学院とは異なり、専門大学院は高度に実用的な専門知識を受け継ぐ教育機関であるため、講師陣は第一線で活躍する通訳翻訳の専門家たちで構成されている。また、学生は、外国語を不自由なく駆使できる能力が求められるため、海外の留学経験者や帰国子女が多数みられる。

2.5 設備

GSITは韓国外国語大学国際館の3階から6階に位置する。230席と56席の発言席、8ブースの設備の整えられた国際会議場（エギョンホール）、8つのブースを備えた国際会議通訳室が3室、4つのブースを備えた同時通訳室が4室、マルチメディア機器が備えられたマルチメディア講義室が8室、各机にコンピュータが備えられたインターネット講義室が3室、学生が自由にパソコンを利用できるコンピュータ室、各国言語の図書のある図書室、自習室、18言語80の衛星チャンネルを受信できる衛星放送室、スタディールーム12室など、通訳訓練に必要な設備が完備されている。

2.6 海外との提携

ESIT（パリ大学付属通訳翻訳高等学院）、米国モンレー大学、台湾輔仁大学通訳翻訳大学院など総83校と提携を結んでいる。日本では、東洋大学、上智大学、早稲田大学、天理大学、中国語圏では、延邊大学、南京大学、復旦大学、北京大学、北京外国語大学、台湾師範大学、輔仁大学、タイではプリンス・オブ・ソクラー大学、シンラパコーン大学、チュラーロンコーン大学などと提携関係にある。

2.7 授業料

入学金は約80万W、授業料は1学期約530~540万Wである⁸⁾。2008年7月24日現在、100ウォン=10.68円で計算すると、初年度は、入学金と授業料の合計金額が1,140万~1,150万ウォン、日本円で約122~123万円あまりとなる。ここ数年間、毎年授業料が引き上げられているが、これは韓国全体にみられる傾向である。学生の約3割がさまざまな形の奨学金を受けている。

2.8 卒業後の進路

国内外のマスコミ、国際機関、政府各機関や一部上場企業など、社会の要所に卒業生が配置されている。また、フリーランス通訳翻訳者として活動する場合は、韓国外国語大学通訳翻訳センターに登録することができる。センターで提供するサービスは、韓国でもっとも信頼される高い品質を誇るものであり、料金体系は通訳翻訳業界の事実上の標準となっている。

表1: 韓国外国語大学通訳翻訳センター料金表 単位: W (=ウォン)

日本語、中国語、仏語、西語の通訳料			
	2時間まで	6時間まで	6時間超過時

同時通訳 (1人当たり)	600,000W	700,000W	100,000W/h
逐次通訳	600,000W	700,000W	100,000W/h

表 2: 韓国語—他

英語	韓国語原文 1 字 (空白含む)	最低 80W	難易度、量、納期 などによる
日本語	韓国語原文 1 字 (空白含む)	最低 80W	
中国語	韓国語原文 1 字 (空白含む)	最低 80W	

表 3: 他—韓国語

英語	英語 1 単語	最低 100W	難易度、量、納期 などによる
日本語	日本語 1 字	最低 40W	
中国語	中国語 1 字	最低 50W	

2.9 研究動向

通訳翻訳界の急成長に伴い、より体系的な研究を行うため 1997 年 5 月、韓国で唯一の総合研究機関である通訳翻訳研究所が発足した。この研究所は、定期的な論文発表会とセミナー開催を通じ、通訳翻訳界の学術的発展に貢献している。

研究所が主催する学術会議には、世界各国から有識者を招聘して行われ、学生の意欲を高めるとともに、現場の経験を次世代に引き継いでいる。1998 年「比較文学研究と翻訳学」、2006 年「通訳翻訳教科課程の現在と未来」、2008 年には「法廷通訳翻訳」をテーマに国際学術会議が開催された。また、1997 年から、論文集「通訳学」を発行することで、経験を体系化・理論化するための枠組みづくりに取り組んでいる。この研究所は、これまで蓄積された知識と経験を通じ、通訳翻訳学が名実ともに学問として位置づけられるよう取り組んでいる。

3. GSIT の教育課程

3.1 制度

修士課程と博士課程が設置されている。修士課程は、入学後 2 年の課程で 44 単位を取得し、卒業試験に合格した者に学位が与えられる。3 年以内に卒業試験に合格できない場合、成績の全体平均が B(80 点)以上の者に「修了」が認められる。修士課程は、共通必須科目以外はすべて実技訓練であり、通訳翻訳理論研究は主に博士課程で開講されている。修士課程と博士課程の授業は完全に分離されており、学生がお互いの授業に参加することはできない。また、修士課程については、ほとんどが専攻必須科目であり、1 週間平均 14~16 時間の授業は全て 1 年間のスケジュールが決められている。

GSIT の修士課程制度の特徴は次の 2 つがあげられる。まず、1 年 2 学期末に専攻区分試験が実施されることである。2 学期までに所定の単位を収め国際会議通訳専攻を希望する者はこの専攻区分試験を受ける資格がある。この試験によって 2 年のクラスは国際会議通訳専攻と翻訳・逐次通訳専攻の 2 つに分かれる。ふたつめの特徴は、修士論文が課されないという点である。希望者のみ修士論文の指導を別途受けることはできるが卒業必須単位には含まれない。実際には修士論文の代わりに翻訳本や論文の翻訳で代替する機会が多い。卒業要件に含まれないにもかかわらず、たとえば筆

者の同期生は16人中14人が指導をうけ提出した。学科や学年によって状況は異なる。

3.2 学科

現在、修士課程には韓英、韓仏、韓独、韓露、韓西、韓中、韓日、韓亜の8学科が設置されている。言語組み合わせは、少なくとも3言語の組み合わせが前提となっている欧米の大学とは異なり、ABの2言語、もしくはABCの3言語の組み合わせが可能である。3言語の場合、そのうち2言語は韓国語と英語でなくてはならない。

4. 授業内容とその他の通訳訓練

4.1 授業内容

GSITでは、使用を定められた教材はなく、担当教官が自由に選定する方法をとっている。教官は現役の通訳翻訳士であるため、現場で使用した新鮮な教材を毎回提供できることが最大のメリットである。こうした生きた教材を使用することは、常に市場の動向を把握するのに役立ち、また学習効果も高いと考えられる。次に、いくつかの授業のシラバスとテーマを抜粋して紹介する。

表8: 日韓逐次通訳・サイトトランスレーションIのシラバス(2005年度)

目的と概要
聞き取りから伝達まで、すべてのプロセスで要求される能力を強化し、逐次通訳能力を高める。
テーマ一覧
労働問題、日本の政治、北東アジア協力、経済分野、歴史問題、IT分野、北東アジア情勢、日韓文化交流、女性問題、自由貿易

表9: 日韓専門同時通訳I(2005年度)

目的と概要
翻講義では、専門分野の難易度の高い演説の同時通訳を遂行できる実力を養成することを目的とする。
テーマ一覧
経済分野演説文(1)、貿易紛争と関連した資料、社会一般に関するテーマ、国際情勢関連の演説文、経済分野演説文(2)、日韓協力に関する会議での発表文、朝鮮半島をめぐる国際情勢に関する発表文、科学技術分野の新しい流れに関する発表資料(1)、東アジア地域安全保障に関する会議資料、医学分野の発表資料、日韓間の文化交流に関する発表資料、科学技術分野の新しい流れに関する発表資料(2)

また、外部から専門家を招聘する「主題特講」という授業も導入されている。これは、通訳翻訳の基礎となる背景知識を幅広く習得し、自分の考えを論理的に整理する能力を高めることを目的としたものである。

表 10: 主題特講シラバス (2005 年度)

目的と概要
外部から専門家を招聘し、毎週特定のテーマに関する講義を実施することで、学生が幅広い分野の知識を身につけられるようにすることを目的とする。
テマ一覧
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「第4回6カ国協議の結果」(国防研究員キム・テウ博士) 2. 「国際機関でのリーダーシップ-UPU 会議を事例として」(社団法人韓国郵便連合代表理事クオン・ヨンス代表) 3. 「韓国式英語を告発する」(世宗大学チェ・ヨンシク兼任教授) 4. 「広告マーケティング」(電通コリア局長アン・サンチョン) 5. 「通訳における読唇術の意味」(高麗大学ホ・テギョン教授) 6. 「政治プロセスへの理解 - 選挙と政党」(社会科学データセンター副所長キム・ヒョンジュン) 7. 「インターネットマーケティング」(キム・チョルウン) 8. 「欧州連合の法的構造」(イ・チョル教授) 9. 「ダイエットと健康管理」(韓国外国語大学キム・テヨン教授) 10. 「ハイパーテキスト」(キム・ヨハン) 11. 「コロンブスの新大陸発見と西欧的思考」(ソン・ギド)

また、上記以外にも、学生がテーマを設定して発表し、それについてディスカッションをする「時事討論」という授業もある。これは、毎週一人が発表を担当するのだが、発表者だけでなくクラス全員がその分野について調査を事前に行い討論するものである。受身になりがちな講義とは違い、全員が能動的に授業に関わるため、知識と理解が深まるとともに、自分なりの意見を B 言語で表現する説得力を身につけることができる。この授業のテーマはそれぞれが関心のあるものを自由に設定できるため、大変活発で効果的な学習方法だった。

表 11: 時事討論シラバス(2005 年度)

目標と概要
<p>通訳翻訳の基本となる時事的・専門的な内容、特に日韓間で争点になる問題を中心にテーマを据え、そのテーマに関する発表とディスカッションを通じて、幅広い分野への理解を深める。また、専門用語の正確な韓国語・日本語表現を身につけ、専攻言語の実力向上と論理的思考力とプレゼンテーションスキルの向上を目的とする。</p> <p>学生自らがテキストを作成し、該当分野に関する理解を深め、正確な出発語・到着語表現を身につけ、専攻言語でのプレゼンテーション能力を向上させる。各分野の専門用語や慣用表現などを調査して身につけ、通訳翻訳の基礎を築く。</p> <p>ディスカッションのテーマを 1 週間前に設定し、毎週ひとりずつ発表する。発表者以外の者も、事前にそのテーマに関するディスカッションの準備をする。発表内容についてディスカッションを行い、テーマに関する知識を深めることで、様々な分野に関する理解の幅を広げていく。</p>
テマ一覧

経済、国際関係、医学、IT、エネルギー問題、金融、建築、国際経済、環境、科学技術、法、文化と歴史

4.2 自主学习

大学院では週に 14~16 時間の授業を受けるのだが、その授業に臨むため、学生同士がグループを作り勉強会をする。これは「スタディ」と呼ばれている。通常 2~3 人で一組となるのだが、パートナーを定期的に変えて新しい視点でお互いに批評を加えることで、それぞれの問題点を発見し改善していく。このスタディは、大学院入学準備の段階からすでに一般的にとられている勉強方法で、その内容はサイトトランスレーション、ノートテキング、メモリーなどが主となる。

通訳翻訳大学院のカリキュラムには含まれてないが、大学院の施設にスタディールームが 12 室あることから分かるように、GSIT の全過程を終えて卒業するまでには授業だけでは十分ではなく、スタディが授業よりも大きなウェイトを占めている。つまり授業に参加するためには、その準備としてスタディで十分な訓練をつむ必要があり、各試験の準備もすべてスタディを通じて行われる。

5. 試験

GSIT では、入学試験、専攻区分試験（希望者のみ）、卒業試験、そして各学期の中間考査、期末考査など合計 11 回の試験を通過しなければならない。次にそれぞれの試験について詳しく説明する。

5.1 入学試験

受験資格は、4 年制大学卒業もしくは卒業予定者、法令により同等の能力が認められるものであり、通訳翻訳の実務経験は問わない。しかし、母国語と専攻語を完璧に使いこなせる能力が、実質的な入学前提条件となっている。定員は決められていない。入学試験料は 100,000 ウォンである。毎年、国内 145 大学と海外 121 大学余りから 1,500 人以上の受験者が挑戦している。最近 5 年間の競争率（韓/英科基準）⁸⁾ を参考までに示すと次のとおりである。

表 4: 過去 5 年間の競争率と男女比（韓英科）

	04 年	05 年	06 年	07 年	08 年
競争率	23:1	17:1	18:1	15:1	14:1
男女比	1:5	1:6	1:4	1:8	1:7

大学卒業後にそのまま進学する場合もあるが、大部分の学生は一度社会にでてから進学する場合も多く、年齢は 20 代後半から 30 代前半がほとんどである。合格者の平均的な入学までの準備期間は 1.8 年くらいである。合格者の準備期間について聞き取りをしたところ、最長が 5 年、最短が 6 ヶ月だった。受験者はほとんどが通訳大学院受験準備のための専門予備校に通い、ノートテキングやメモリーなど基本的な通訳技術を修得している。筆者が受験した 04 年度は、1 次試験に専攻言語と全学科共通の英語筆記試験、2 次試験に国語（韓国語）と翻訳、実技、面接などが実施されたのだが、現在は、共通英語試験が廃止され、1 次試験に国語と専攻言語の筆記試験等、2 次試験に AB 言語のエッセイ、面接等が課されるようになった。

表 5: 第 1 次試験の時間と配点

2 言語 (A-B) 課程	時間	配点
①韓国語	50 分	50 点
②B 言語 (専攻外国語)	60~100 分	150 点
合計		200 点
3 言語 (A-B-C) 課程	時間	配点
①韓国語	50 分	50 点
②B 言語 (専攻外国語)	60~100 分	150 点
③C 言語 (専攻外国語)	60~100 分	150 点
合計		350 点

表 6: 第 2 次試験の時間と配点

2 言語 (A-B) 課程	時間	配点
①翻訳(A→B, B→A)	60 分	50 点
②Essay(A, B)	60 分	50 点
③B 言語口述(専攻外国語)		100 点
合計		200 点
3 言語 (A-B-C) 課程	時間	配点
①翻訳(A→B, B→A)	60 分	50
②翻訳(A→C, C→A)	60 分	50
③Essay (A, B, C)	90 分	75
④B 言語口述		100
⑤C 言語口述		100
合計		375 点

a) 第 1 次試験 (筆記)

・ 韓国語共通試験

前半は聴解力テスト 6 問、後半は文法や発音、慣用表現、故事成語、漢字など 24 問の合計 30 問で構成されている。まず聴解力テストでは 5 分程度の韓国語文章が読み上げられ、それに関する質問に答えるものである。文章は 3 つで各 2 問ずつの問題があり、回答は 3~4 つの選択肢から選ぶ方法をとる。後半部分も 4 つの選択肢から選ぶ方法である。2007 年の試験問題から例をひとつ挙げてみる。

例 1: 韓国語共通(2007 年度入試問題)

次の中で意味が同じでないものはどれか

- ①走馬看山 ②刮目相對 ③天地開闢 ④桑田蒼海

韓国では基本的にハングル表記のみで、漢字は日本のように多用されていないため、漢字の読み

書きはかなりハードルが高いといえる。またハングルは表記と発音の不一致や、分かち書きなどの法則が複雑で、韓国語ネイティブにとっても国語試験は難関であるといえる。(上記例1は漢字の意味を問う問題であるが、全て漢字の試験というわけではない。)

・専攻語試験

聴解力の評価試験である。3～4分程度の専攻語及び韓国語の原稿が読み上げられ、その文章に関する質問に答える試験である。文章は専攻語が3つ韓国語が1つで、問題は全10問あり、解答はそれぞれ専攻語、韓国語など指示された言語で記入する。いちどしか朗読されないためノートテーキングが合否の鍵となる。

例2: 日本語(2007年度入試問題)

みなさんは、バリアフリーという言葉聞いてどのようなことを思い浮かべますか。「バリアフリー」とは、もともとは建築用語で「バリア」、つまり障壁となるものを取り除き、生活しやすくすることを意味します。建物内の段差など、物理的な障壁の除去と言う意味合いから、最近では「障害のある人の社会参加を困難にしている社会的・制度的・心理的なすべての障壁の除去」という意味で用いられています。最近使われている意味でのバリアとしては、次の4つのバリアがあると言われています。

まず、物理的なバリアです。車イスの利用者が、段差があったり幅が狭くて車イスが通れない場合や、視覚障害者が、品物の容器の形が同じで内容の区別がつかない場合などがこれにあたります。

次に、制度的なバリアがあります。障害の有無や等級によって資格が制限される場合や、盲導犬を連れて入れない店、乳幼児連れでは入店を断られる店などです。

そして、文化・情報面でのバリアがあります。障害などにより文化活動をするチャンスや必要な情報を平等に得られないこと、あるいは、交通機関などが利用できないために文化活動ができないことを意味します。

最後に、意識上の心理的なバリアがあります。作り手の認識不足のために人に「やさしくない」街を作ってしまったたり、言動によって相手を傷つけたりする心のバリアです。

一方、最近これに似た言葉で「ユニバーサルデザイン」という表現もあります。高齢者や障害者だけでなく、全ての人と一緒に使えるようなモノ、サービスのあり方を示します。考え方としては、現在あるバリアを取り除くバリアフリーに大して、最初から全ての人を使いやすさを追求するもので、使う人を制限しない包括的な考え方です。

モノを作る人だけでなく全ての人々の心がユニバーサルデザインに近づけば、高齢者や障害者のことを他人事と思うことなく、全ての人々のことに思いを馳せることができる豊かな心が持てるようになるのではないのでしょうか。

それでは問題です。

バリアフリーのもともとの意味と、現在使用されている意味はそれぞれどのようなものですか。韓国語で答えなさい。(解答時間3分)

続いて問題です。

文化・情報面でのバリアとして、どんなものがありますか。韓国語で答えなさい。(解答時間3分)

続いて問題です。

ユニバーサルデザインとバリアフリーの違いは難ですか。韓国語で答えなさい。(解答時間3分)

・口頭試験

面接と実技試験は大体20~30分くらいである。面接官は各言語のネイティブと韓国語ネイティブが2名ずつ配置される。自己紹介や面談を行い専攻言語の流暢さや正確さ、通訳としての資質を評価する。また、面接の中でメモリーの実技テストが行われるのだが、まず与えられたB言語の文章を1度朗読したあと、用紙を伏せてB言語で再生する方法をとる。1度読んだ外国語の文章をそのまま覚えて再生するというのは、非常に難易度の高い試験である。筆者はこの訓練のために、新聞のコラムを覚えて再生する訓練を毎日のように繰り返したのだが、このような地道な訓練を繰り返すことにより、初見で要旨を把握し言葉に出して説明するという、通訳に欠かせない能力が鍛えられた。

5.2 中間考査、期末考査、その他の試験

それぞれの学期の半ばと終わりに、学業の進捗を確認するための試験が行われる。これは授業科目によって様々な自由形式で行われる。たとえば逐次・同時通訳の場合は、それぞれ5分、10分程度の原稿が朗読され、それを通訳したものを録音して提出する方法をとる。採点方法は、正確さ、流暢さ、発音の正確さ、声などさまざまな側面から査定される。場合によってはノートテーキングしたものと一緒に提出しチェックを受ける。翻訳の場合は、所定の時間内に一定の分量の翻訳を行う。時事討論などの場合は、授業で扱ったテーマについてどれくらい理解したかを問われる。この定期考査以外にも、ほぼ毎日、授業ごとに専門用語や慣用表現のクイックレスポンス、時事用語の説明、漢字の読み・書き取り試験などが常時行われる。

5.3 選考区分試験

この制度は2000年度の入学者から適用されるようになった。2学期までに所定の単位を収め、国際会議通訳専攻を希望する場合のみ、この専攻区分試験を受けることができる。試験を受けない場合は自動的に翻訳・逐次通訳専攻クラスに進級する。試験科目は、2言語課程の場合、逐次通訳A-B、B-A(配点各100点)の2科目、3言語課程の場合、逐次通訳A-B、B-A、C-Aの3科目で、各科目80点以上を合格とする。この試験は、1年2学期の期末考査前後に実施され、1回しか受けることはできない。

5.4 卒業試験(修士学位請求総合試験)

卒業試験は1年に2回実施され、6科目各80点以上を合格とする。過去5年間、卒業試験の合格者は、累積基準で志願者の43%程度である。1試験あたりの志願者は日本語学科で例年約20人、その内合格者は約5人程度である。学科によっては合格者の出ない場合もある。合格点に至らなかった科目だけを再受験することができるが、受験回数は最大3年以内7回までと制限がある。合格できなかった者は課程「修了」となる。大学院付属の通訳翻訳センターは、3回以内に合格した卒業生のみ登録することができる。受験科目はそれぞれ次のとおりである。

表 7: 卒業試験の科目

2 言語課程 (翻訳・逐次通訳専攻)		
試験科目	配点	備考
産業経済翻訳 A-B、B-A	各 100	
科学技術翻訳 A-B、B-A	各 100	どちらかを選択
政治法律翻訳 A-B、B-A	各 100	
逐次通訳 A-B、B-A	各 100	
合計 6 科目	600 点	
2 言語課程 (国際会議通訳専攻)		
試験科目	配点	備考
逐次通訳 A-B、B-A	各 100	
同時通訳 A-B、B-A	各 100	
専門同時通訳 A-B、B-A	各 100	
合計 6 科目	600 点	
3 言語課程 (翻訳・逐次通訳専攻)		
試験科目	配点	備考
産業経済翻訳 A-B、B-A、C-A	各 100	
科学技術翻訳 A-B、B-A、C-A	各 100	どちらかを選択
政治法律翻訳 A-B、B-A、C-A	各 100	
逐次通訳 A-B、B-A、C-A	各 100	
合計 9 科目	900 点	
3 言語課程 (国際会議通訳専攻)		
試験科目	配点	備考
逐次通訳 A-B、B-A、C-A	各 100	
同時通訳 A-B、B-A、C-A	各 100	
専門同時通訳 A-B、B-A、C-A	各 100	
合計 9 科目	900 点	

6. まとめにかえて

6.1 GSIT の課題

以上のとおり、韓国の通訳翻訳教育事情について GSIT を中心に述べてきた。1997 年に設立された梨花女子大通訳翻訳大学院⁹⁾などを含め、韓国のほぼどの大学院でも GSIT と同じく修士課程では実践的な訓練を集中して行う形がとられている。筆者が実際に GSIT で訓練を受けて惜しまれたのは、このように実践的な訓練に偏りすぎて、通訳翻訳理論の教育が不十分であったという点である。

こうしたことから、GSIT の課題としてまず考えられるのが、修士論文についての位置づけである。通訳翻訳大学院では、「卒業試験」が義務付けられており、論文の提出は任意である。修士課程で技術的訓練を、博士課程で理論教育をという棲み分けがなされている現状において、修士課程で論文を書く余裕は学生側にはなく、ほとんどが書籍や海外論文の翻訳で代替している。また、指導教官も指導できる分野と担当できる学生数に限りがあり、卒業要件に含まれない論文の位置づけについ

での議論が待たれるところである。

次に在学期間についてであるが、入学準備のために平均1.8年もの間予備校に通う実態を鑑みると、学部との連携も有効ではないかと考えられる。現在、通訳翻訳大学院が流行のように新設されはじめているが、学部の中にも通訳翻訳コースを設けるところが出始めている。こうした点からみて、学部との連携強化によるエキスパート養成プログラムを開発するなど、独自の道を探求することも必要ではないかと考えられる。

6.2 展望

韓国は近年、外国人住民が100万人、人口の2%に達するなど急速に内なる国際化が進んでいる。¹⁰⁾ こうした中、社会では様々な葛藤が生じ、司法通訳や医療通訳などの専門分野でも通訳翻訳の需要が増加している。特に法廷通訳に関しては「人権条約」を批准した国にふさわしいサービスを提供することが求められている。

GSITは常に市場志向主義を貫いてきたが、こうした社会のニーズに直結した人材を輩出できるようカリキュラムの見直しが進められている。最高裁判所や検察庁とのパートナーシップのもと、法廷通訳の資格認定制度づくりを推進する上で大学院は大きな役割を担っている。また、韓国では、2009年から法学専門大学院が開講されるのだが、GSITと共同学位課程を運営する提携が結ばれた。法学専門大学院は6学期制、GSITは4学期制で、両方で講義を受ける場合、各1学期ずつ免除されるというものである。ただし入学試験、卒業試験はそれぞれの試験をうけなくてはならないのでハードルは高い。

一方、日本でも社会のニーズに対応する先進的な通訳翻訳教育¹¹⁾の取組みがなされている。日本と韓国の通訳翻訳教育の現場が相互に情報交換し協力し、新しい時代に向けた人材育成がより一層促進されることを期待している。

筆者紹介：金 静愛 (KIM Jung-Ae) 通訳者。韓国外国語大学通訳翻訳大学院韓日科卒業。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程在籍。研究分野は通訳翻訳学、研究主題は司法通訳翻訳論。
連絡先：kimjun8005@yahoo.co.jp

【謝辞】本稿執筆にあたり大阪大学グローバルコラボレーションセンターの津田守教授から貴重なご助言とご指導を頂いたことに深く感謝いたします。また、本稿は、2008年7月26日の関西例会で発表したものに加筆・修正を加えたものです。発表の機会を与えてくださった神戸市外国語大学の船山仲他教授、そして貴重なコメントを下さった関西例会参加者の皆様に改めて謝意を表します。

【註】

- 1) 卒業生の数について、大学院教務課では正式な統計をとっていないということなので、韓国の中央日報2008年8月16日の記事 (http://article.joins.com/article/article.asp?Total_ID=3262209) を参照した。2005年の新生に配布された資料には、第23期までの卒業生が1,458人と記載されている。
- 2) 2006年から2年間、大学院長を勤めた郭重哲 (Kwak Joong Chol) 教授。GSITの第1期卒業生

- であり、ESIT（パリ大学附属通訳翻訳高等学院）の卒業生でもある。韓英仏通訳者。
- 3) 2006年4月10日の『世界日報』に掲載された郭前院長のインタビュー記事によると、約1/3しか卒業試験に合格させなかったが、1/2レベルにまで引き上げると述べている。
 - 4) 2008年2月に大学院長に就任したアン・インギョン教授。GSITの卒業生。韓独通訳者。
 - 5) UIA(国際団体連合: Union of International Associations)の統計によると、2007年に世界で開催された国際会議件数は前年比16.3%増の10,318件であった。国際会議開催数で最も多かったのが米国1,114件、フランス598件、ドイツ523件であった。日本は開催件数を、2006年の166件(18位)から448件と大きく伸ばし、同じく大幅に件数が増加したシンガポール466件(世界4位、アジア1位)に次いで世界5位(アジア2位)とベスト10入りした。アジアの都市別では、シンガポールが1位(465件)、東京が2位(126件)、ソウルが9位(121件)であった。(日本政府観光局JNTO、http://www.jnto.go.jp/jpn/press_releases/080929_conventionstatistics2007.html)
 - 6) 韓国教育人的資源省が韓国教育開発院を通じて行った統計によると、2006年に海外留学した小・中・高校生は史上最高の2万9,511人で、ここ8年の間に19倍増加した。大学以上の学位課程留学および語学留学は、21万7,959人で、2003年の15万9,903人より増加している。留学先を国家別にみると米国が27.1%、中国19.4%、日本8.7%となっている。(東亜日報2007年10月4日記事より、<http://www.donga.com/fbin/output?n=200710040074>)
 - 7) 「頭脳韓国21」(通称BK21)とは、韓国教育省が21世紀のリードする人材育成を目的として、1999年から7年計画で実施した教育改革政策のことである。世界水準の研究が行われている大学院を中心に、年間2,000億ウォン、総額1兆4,000億ウォンの予算が投入された。創造的で国際的な高等頭脳を輩出し、優秀な研究成果を確保し、韓国の産業界との産学協働を通じて、産業の発展と国際競争力を高めることが1次的な目標である。
 - 8) 『ソウル新聞』2008年6月3日掲載のアン・インギョン院長インタビュー参照。
 - 9) 梨花女子大学通訳翻訳大学院は1997年に開設された。2000年に専門大学院の認可を受け、2005年に博士課程を新設した。通訳コース、翻訳コースでそれぞれ韓英、韓仏、韓中、韓日の4ヶ国語の学科が設置されている。
 - 10) 韓国法務省の統計によると、2007年の韓国在留外国人数は合計1,066,291人で、前年より17.2%増加した。在留目的を見ると労働目的が47.1%と最も多く、結婚による移民は110,362人(10.4%)である。(韓国法務省統計資料 <http://www.moj.go.kr/>)
 - 11) 旧大阪外国語大学大学院通訳翻訳専修コースでは、コミュニティ通訳の着目した医療・司法通訳翻訳のカリキュラムが設置されたが、2007年の大阪大学との統合により、現在募集は行われていない。在学生のために引き続き開講されている科目もある。詳しくは大阪大学シラバスを参照。(<http://sunfish.exp-net.osaka-u.ac.jp/koan-portal/>)

【参考文献】

- 大阪大学 (2008) 『大阪大学大学院人間科学研究科シラバス』
 韓国外国語大学通訳翻訳大学院 (2008) 『2007年度問題集』
 津田守編 (2005) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム』 大阪外国語大学
 津田守編 (2007) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム・続』 大阪外国語大学
 Ahn, In-kyoung. (2007). Curriculum Design of GSIT, HUFS: On the Basis of a Survey. *Interpreting and Translation Studies* 10 (2): 85-103. (韓国語)

Kim, Jin-ah. (2008). The Present Condition and Problem to be Solved of Court Interpretation. *Interpreting and Translation Studies* 11 (2): 21-37. (韓国語)

Kwak, Joong-Chol. (2004). A Study on Korean Self-made Interpreters' Performances. *Journal of the Interpretation and Translation Institute*, 8: 1-38. (韓国語)

【ウェブサイト】

韓国外国語大学通訳翻訳大学院 [Online] <http://gsit.hufs.ac.kr/> (2008年8月28日)

梨花女子大学通訳翻訳大学院 [Online] <http://home.ewha.ac.kr/~gsti/> (2008年8月28日)

韓国外国語大学通訳翻訳センター [Online] <http://www.hufscit.com/> (2008年8月28日)

「郭重哲前院長のインタビュー」世界日報 2006年4月10日掲載 [Online]

<http://www.jckwak.net/press/board.php?mode=view&start=0&no=73&index=68&total=78&scale=15&search=&schKey=&schVal=> (2008年8月28日)

韓国教育開発院 [Online] <http://www.kedi.re.kr/> (2008年8月28日)

韓国法務省 [Online] <http://www.moj.go.kr/> (2008年8月28日)

「アン・インギョン院長インタビュー/今年の入試ポイント」ソウル新聞 [Online]

<http://www.seoul.co.kr/news/newsView.php?id=20080603016004> (2008年8月28日)

国際団体連合 Union of International Associations [Online] <http://www.uia.be/> (2008年8月28日)

世界通訳翻訳大学(院)協会 [Online] http://www.uni-leipzig.de/~isuew/ciuti/en/frame_en.html (2008年8月28日)

【資料】韓国外国語大学通訳翻訳大学院 2008年度開講科目一覧

修士課程の開講科目

a) 共通必須科目

1. 通訳翻訳入門 (Introduction to Interpreting and Translation)

2. 主題特講 (Special Lecture)

b) 選択科目

1. B言語熟達 I, II (Advanced B Language Discourse)

2. 韓国語熟達 I, II (Advanced Korean Language Discourse)

3. 同時通訳入門 (Initial Simultaneous Interpreting)

4. 実務翻訳 (Practical Translation)

c) 専攻必須科目

1. 一般翻訳 A-B (Basic Translation)

2. 一般翻訳、サイトトランスレーション B-A/C-A (Basic Translation : Written and Sight Translation)

3. 産業経済翻訳 A-B/B-A/C-A (Translation of Economic and Commercial Texts)

4. 科学技術翻訳 A-B/B-A/C-A (Translation of Scientific and Technical Texts)

5. 政治法律翻訳 A-B/B-A/C-A (Translation of Political and Legal Texts)

6. 翻訳セミナーI, II (Seminar in Translation)

7. 翻訳 Practicum (Practicum in Translation)

8. 逐次通訳 A-B/B-A 入門(Introduction to Consecutive Interpreting)

9. 逐次通訳 A-B/I, II, II I(Consecutive Interpreting I, II, III)

10. 逐次通訳、サイトトランスレーション B-A/C-A I, II, II I(Consecutive Interpreting Sight Translation)
11. 同時通訳 A-B/I, II (Simultaneous Interpreting)
12. 専門同時通訳 A↔B (Simultaneous Interpreting for Specific Areas)
13. 専門逐次通訳 A-B/B-A (Consecutive Interpreting for Specific Areas)
14. 模擬会議 I, II(Mock Conference)
15. 逐次通訳模擬会議 (Mock Conference in Consecutive Interpreting)
16. 主題別時事討論 I,II (Debate in Current Affairs)

博士課程の開講科目

a) 必須科目

1. 翻訳理論 (Translation Theory)
2. 通訳理論 (Interpreting Theory)

b) 必須選択科目

1. 翻訳セミナー (Seminar in Translation Theories)
2. 通訳セミナー (Seminar in Interpreting Theories)
3. 翻訳/通訳学研究方法論 (Translation/Interpreting Studies Research Methodology)
4. 翻訳/通訳学特別研究指導 (Guided Research in Translation/Interpretation Studies)
5. 翻訳/通訳学特別講読指導 (Directed Readings in Translation/Interpreting Studies)
6. 翻訳/通訳とコミュニケーション (Translation/Interpreting & Communication)
7. 翻訳/通訳の歴史 (History of Translation/Interpreting)
8. コンピュータと翻訳 (Computer & Translation)
9. 専門用語研究 (Terminology Studies)
10. 翻訳/通訳教授法 (Translation/Interpreting Didactics)
11. 文学翻訳 (Literary Translation)
12. テキスト言語学 (Text Linguistics)
13. ディスコースと翻訳/通訳 (Discourse & Translation/Interpreting)
14. 機械翻訳 (Machine Translation)
15. 言語と情報 (Language & Information)
16. 通訳/翻訳と文化 (Interpreting/Translation & Culture)
17. 言語と社会 (Language and Society)
18. 言語学入門 (Introduction to Linguistics)
19. 言語学セミナー (Seminar in Linguistics)

